

京都地域情報・文化遺産データベースの展開と活用 — 「郡村誌」と愛宕郡統計地図 —

東 昇

はじめに

本稿は、昨年度に引き続き京都府下における歴史資料を有効に活用するための京都地域情報・文化遺産データベース構築についてまとめたものである。本年度は特に展開と活用に重点を置いて調査研究を進めた。この研究は、府内に膨大に存在する文化遺産を、現在・未来の住民のための地域情報として有効に利活用するためのデータベースを構築するという課題から出発した。

ここで対象とする歴史資料とは、明治期に京都府が調査した「郡村誌」「町村沿革調」「維新以前地方民政制度調査」である。またデータベースの中心となる目録データは、京都府立総合資料館歴史資料課が作成した「近世領主並びに近世村町別閲覧可能関連文書一覧」に限定している。

前稿では、まずデジタルアーカイブズ、データベースの現状の分析として、総合資料館のデジタルアーカイブ、データベース計画を概説し、他館の事例やこれまでの研究蓄積について述べた¹。そしてデータベースの基礎となる目録データ「近世領主並びに近世村町別閲覧可能関連文書一覧」と、歴史資料の「郡村誌」「町村沿革調」「維新以前地方民政制度調査」の概要を紹介し、最後にデータベースの企画として、設計、構築していく上での構想、内容、課題をまとめた。そこでの構想・課題は、①資料のテキスト化による検索対象の広がり、②文化遺産のデータ化による地域の記憶の継承、③資料の情報化における史料解読リテラシー（専門的知識）の必要性、④データベース検索結果の地図への表示、⑤利用者を想定したデータベースの有効性の検証の5点である。本稿ではこの構想・課題の①④⑤を中心に、その展開、活用事例を提示して京都地域情報・文化遺産データベースの可能性を考えていきたい。

1 データベースの展開、テキスト化・比較・統計地図

1-1 「郡村誌」のテキスト化と人材育成

最初に昨年度の構想①資料のテキスト化による検索対象の広がり③資料の情報化における史料解読リテラシー（専門的知識）の必要性、について、2年間の成果をもとに方向性を述べたい。

昨年度のACTRによって旧愛宕郡域（現京都市左京区域）の明治期の地誌資料3件のべ101村分の翻刻とデータ入力完了した。その内訳は明治16年（1883）「郡村誌」愛宕郡の13万7000字、明治20年（1887）「町村沿革取調書」愛宕郡（以上、京都府立総合資料館所蔵）19万3000

字、明治44年(1911)年『京都府愛宕郡村誌』(愛宕郡役所編纂、復刻版『洛北誌』を利用)の21万8000字、合計54万8000字となる。また今年度は旧葛野郡域(現京都市域)の明治期の地誌資料2件のべ73村分の翻刻とデータ入力を実施した。その内訳は明治16年(1883)「郡村誌」葛野郡の13万4000字、「町村沿革取調書」葛野郡1(以上、京都府立総合資料館所蔵)の6万4000字の合計19万8000字となる。2年間で総計74万6000字という膨大な量の翻刻とデータ入力が終了した。しかし2年目は予算の削減のため、すべての資料の翻刻はできなかった。

また現在、府下の「郡村誌」をテキスト化する作業として、丹後国加佐郡の郡村誌のデータ化を進めている。130村を超える近世村の村界を地図化する作業と、近世の村明細帳である「土目録」のデータ入力を開始した。山城国各郡と違い村数が多い「郡村誌」の入力は、今後の課題である。

この「郡村誌」他、地域情報を含む資料をテキストで蓄積すれば検索可能となり、地域に対する新たな視点を持つことができる。地道な作業であるが、昨年も述べたように資料や文化遺産の調査、翻刻や記録などの資料の情報化は、史料解読リテラシー(専門的知識)が必要である。文書資料を翻刻してテキスト化できる能力は、大学等において史料解読リテラシーを身につけ活用できる人材を育成し、また資料館・博物館・教育委員会等を中心に史料解読リテラシーを持つ専門職の採用が必要である。

1-2 府県による「郡村誌」記載の比較 - 対馬の安徳天皇陵墓 -

つぎに京都府以外の「郡村誌」について、全国への展開を視野に入れ記載の比較を考えていきたい。これまでに長崎県の対馬国「上下県郡村誌」の分析を行った²。明治期に対馬における安徳天皇陵の陵墓認定運動について、「上下県郡村誌」久根田舎村の「陵墓」項目を利用している³。この項目は、「愛宕郡村誌」や「葛野郡村誌」にも掲載されるが数行程度であり、陵墓の多い山城国に比較して記載分量が1頁以上にわたり多い。たとえば安徳天皇の父高倉天皇の陵墓と推定される愛宕郡聖護院村の「古陵」では、「村ノ北宇畠ニアリ、凡三坪ノ地対土高二十一間今民有地タリ相伝ヘテ後、高倉帝ノ陵ト称スレ共分明ナラス」と48字である。また治定された陵墓でも愛宕郡勝林院村の後鳥羽上皇陵(安徳天皇の兄弟)では「村ノ東方字売炭山ノ麓ニアリ、塔ノ高サ凡二間、兆域東西十間三分南北十九間二分、面積百九十七坪八分、陵上檜杉数十株アリ」と57字である。

一方「上下県郡村誌」には「安徳帝御陵見込地」として、つぎの通り陵墓の営繕状態、安徳天皇を始祖とする宗家の歴史、これまでの陵墓認定運動が詳しく記される。

封土ノ高三尺其上ニ山石ヲ樹ツ、高三尺可リ傍櫻樹三株アリ、境内東西十二間南北二十五

間反別六畝廿八歩、村ノ西北字補陀洛山ノ内小字皇家(クワウヤ)ノ山腹ニ在リ、明治十七年十二月安德帝御陵墓見込地宮内省ト書シタル禁標ヲ建テ、且四周柵ヲ設ケ以テ人ノ漫リニ入ルコトヲ禁ズ(後略)

この最初の陵墓の営繕状態部分だけでも129字あり、全体では811字となる。「愛宕郡村誌」と「上下県郡村誌」の記載の違いは明白である。これは当時未治定であった安德天皇陵を対馬に認定するための運動、県や中央政府への働きかけの一環として記された可能性があり、政治的な背景により「郡村誌」が利用されたことがわかる。このように全国の「郡村誌」を比較することで、記載の違いや歴史的背景などを知ることができ、京都府を超えた地理的な比較・展開も重要な視点である。

1-3 明治前期の愛宕郡統計地図の作成—MANDARAの利用—

全国への展開については、この2年間の本報告書において、すでに山田洋一氏が全国の14カ国について、村の領主情報を記入した地図を作成した⁴。しかしこの地図表示には膨大な時間と専門的能力が必要である。このことは昨年度の課題④データベース検索結果の地図への表示についても述べているが、その解決策の一つが地理情報分析支援システム MANDARA を応用した統計地図の作成である。MANDARA は埼玉大学教育学部社会科教育講座の谷謙二氏が開発した、フリーソフトである⁵。このソフトでは村界を記した地図を画像データで作成し、地図へ表示したい数値を CSV データ(村誌統計表)として、この両方を組み合わせて表示を行う。村界図に関しては、本報告書に掲載した山田洋一氏の付図7「郡村誌情報提示のための正式2万分1地形図等による(山城国)愛宕郡村界図案」を利用した。またその作成方法については、同じく山田氏の「2 本データベースの基礎作業としての近代地形図等による郡村誌用村界図の作成—(山城国)愛宕郡—」に詳しく紹介されている。じつはこの村界を確定する作業が労力の多い作業であり、このため全国の近世村の村界図の作成が遅れている原因の一つといえる。

また村誌統計表は、史料翻刻から必要な項目をエクセルに入力していく作業であり、これまで八幡市、城陽市で実施した⁶。今回、愛宕郡の田畑の面積、人口、戸口、牛馬、舟車について村誌統計表を作成した。そしてこの村界図と村誌統計表をもとに作成したのがつぎの図1~4である。

この図の詳細な分析は別のテーマとなり、今後の課題であるが、地図化するとなぜこのあたりに牛が多いのか、田畑の割合が違うのかなどが一目瞭然となる。データベースの展開・表現方法として、この最初のわかりやすさ、きっかけが重要といえる。ここから疑問を検討していくことがつぎの段階であり、そこで資料の翻刻や文化遺産の情報を利用できるようなくみを構築していくことが本データベースの課題といえる。

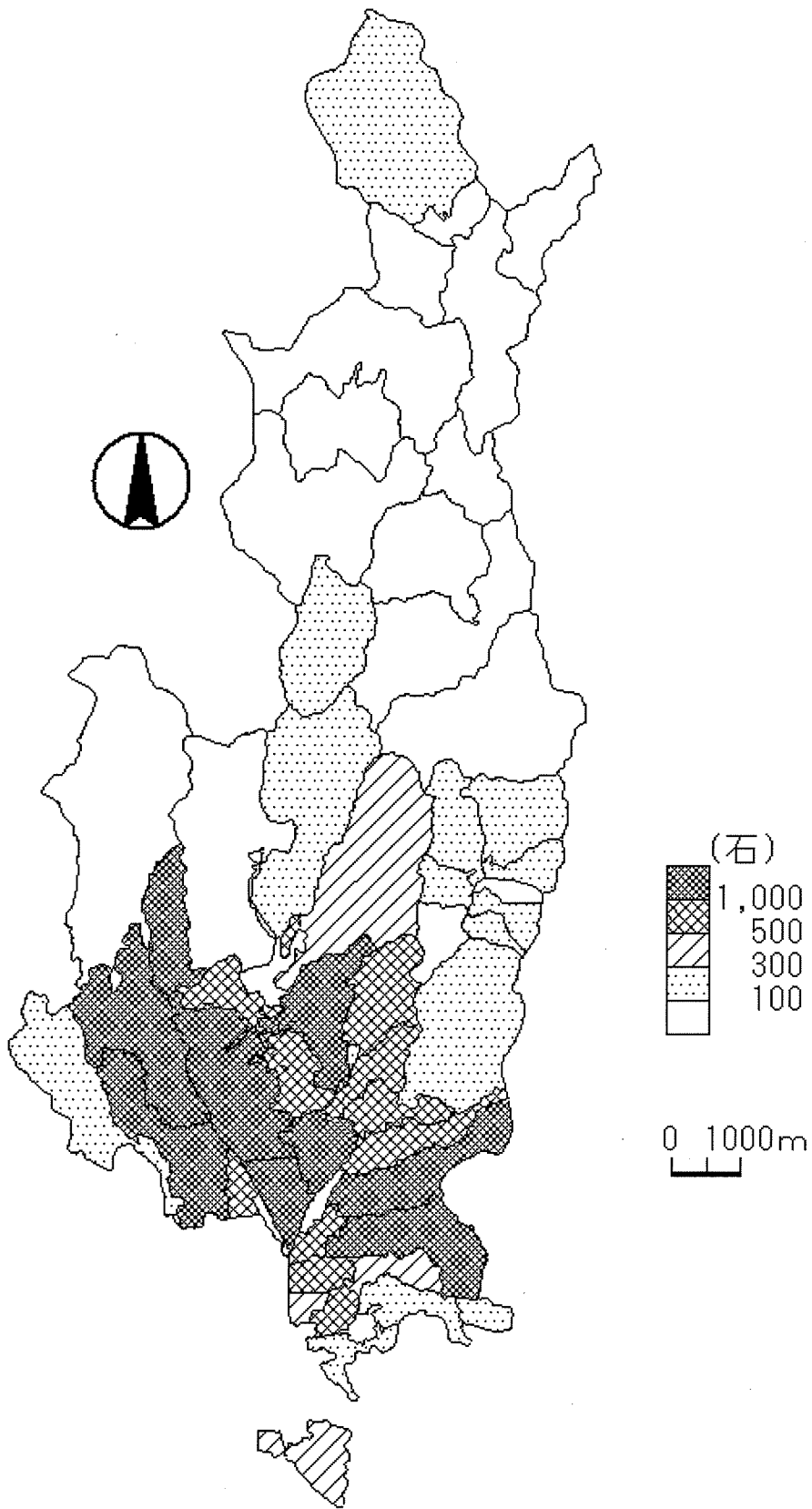
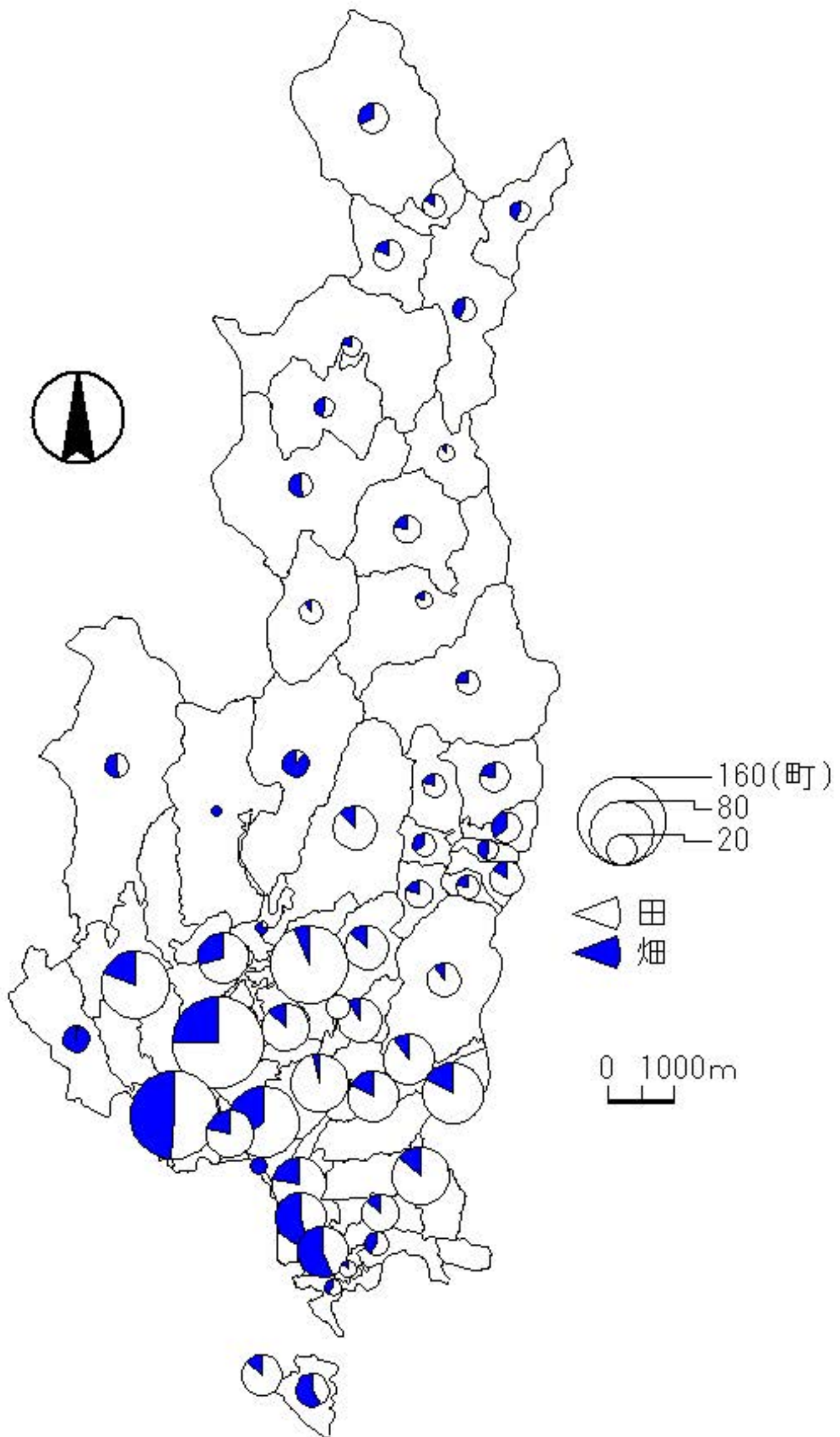
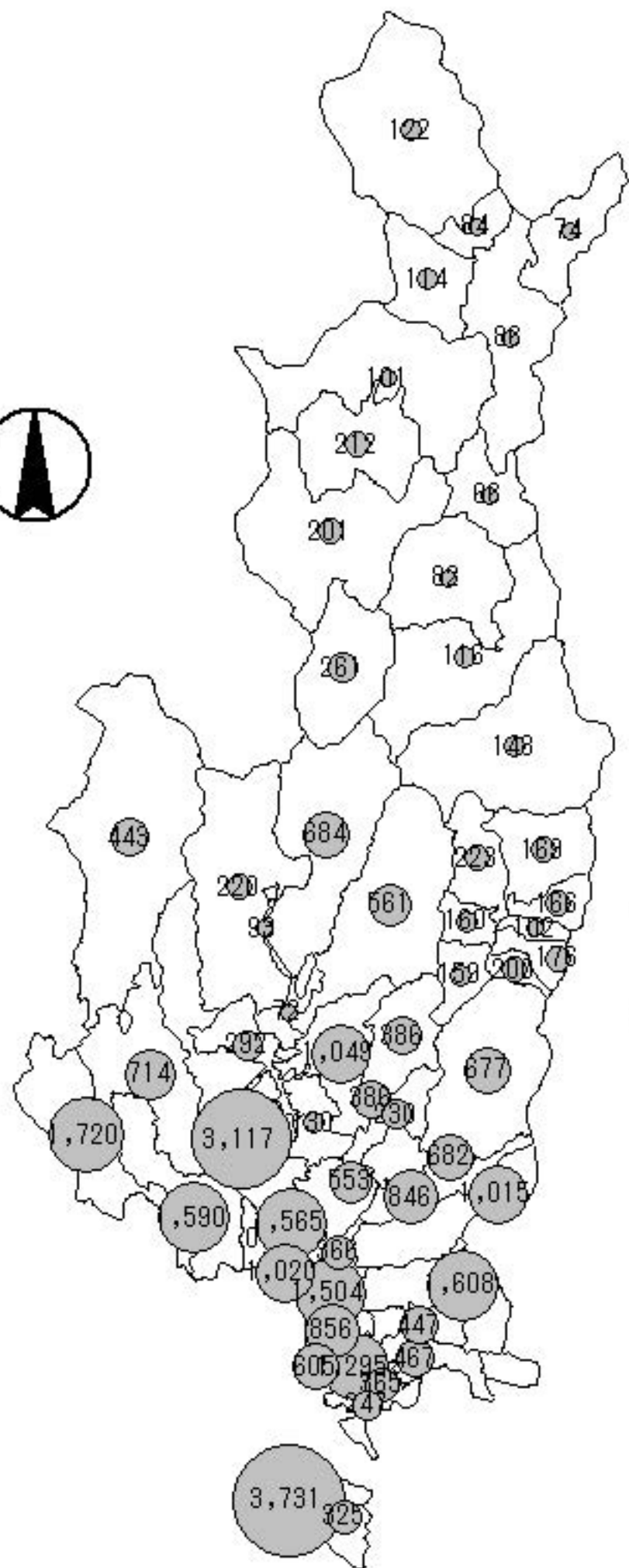


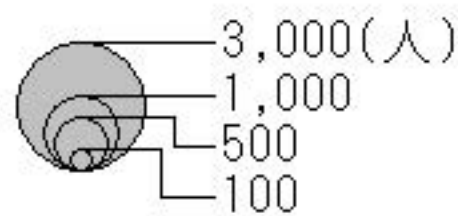
図1 愛宕郡の石高分布

(石高は山田氏論考表の「旧高旧領取調帳」を参考にした)

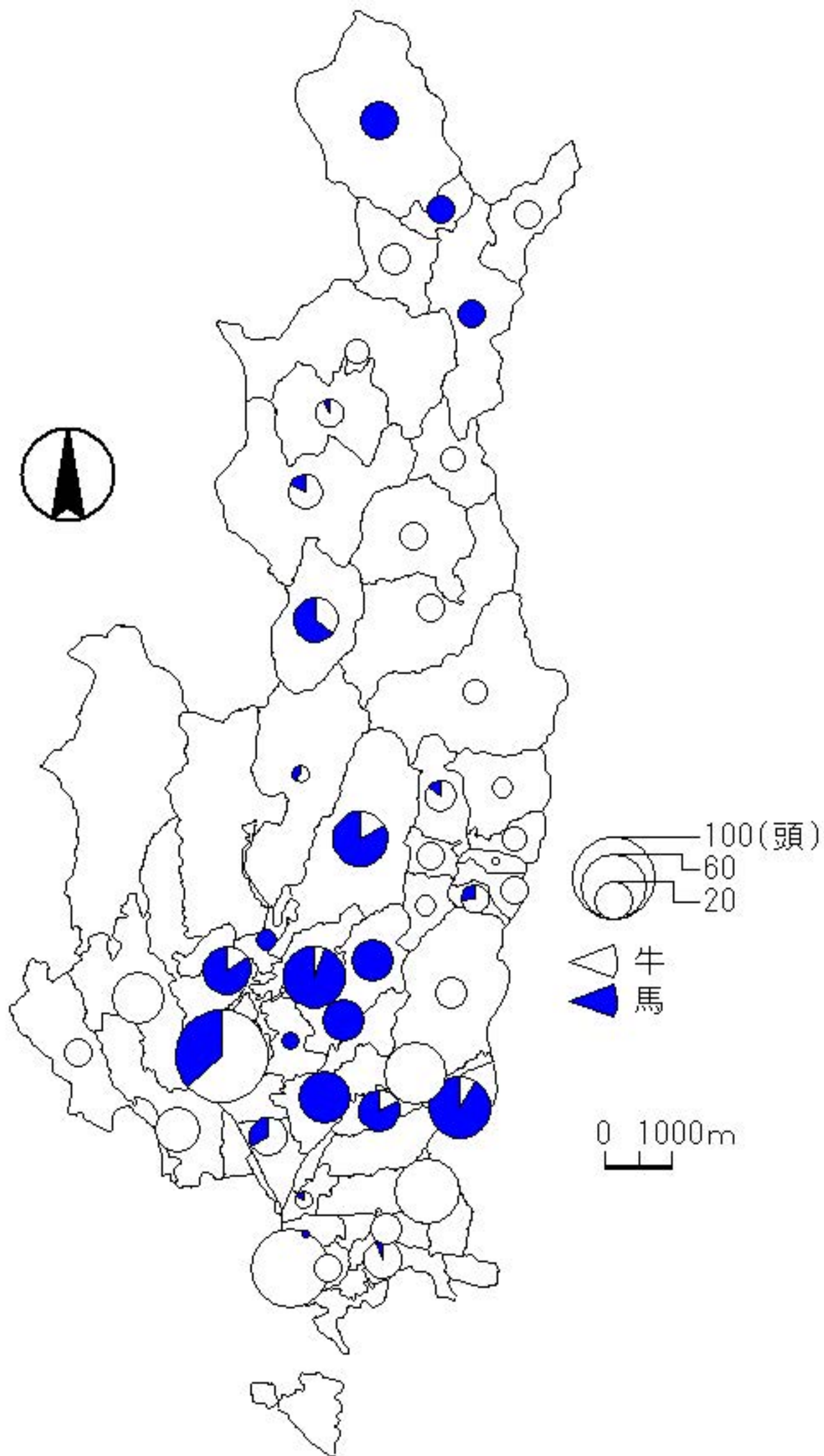




人口



0 1000m



2 地域との連携と AR 技術の利用—二ノ瀬・城陽・岡崎の事例—

最後の課題⑤利用者を想定したデータベースの有効性の検証について、今年度の活動事例のなかから3つの事例を紹介したい。

まず本報告書の西田陽子氏の「幕末期の奉先堂における儀礼の特色—大学頭林家と愛宕郡二ノ瀬村—」である。この論考は近世の愛宕郡二ノ瀬村を対象とした西田氏の卒業論文であるが、分析もさることながら膨大な史料翻刻、表があり、今後の地域研究に重要な資料となりうるため掲載した。この卒業論文は、昨年度現地調査を行ったことがきっかけとなり、近世文書を中心に「郡村誌」「町村沿革史」等も利用している。この奉先堂は、近世の領主林大学頭の歴代を祀る廟所であり、村人が忌日の儀礼を執行していた。「郡村誌」（補足史料1、83～84頁）には、近世の支配をしめす「管轄沿革」に「往古ヨリ御料地タリ、慶長中更ニ徳川氏領トナリ」とあり、幕府領であったとする。この記述自体は間違っているが、他の項目では林家の痕跡も記されている。

「古跡」のなかで、「奉先堂址、林道春以下歴代ノ肖像ヲ祭ル所ト云、「道春ハ本村ノ人ナリ其遺址廃絶シテ」（抹消）、其遺址「詳ナラス」（抹消）存ス、三哀堂址、道春ノ三子ヲ祭ル所ト云、遺址同上、林氏ノ旧臣今井宗八ナル者本村ニ住シ肖像遺物等ヲ蔵スト云フ」とある。林家歴代を祀る奉先堂、三哀堂址についての解説である。近世の二ノ瀬村、奉先堂については西田論考を参照いただきたいが、近世文書、「郡村誌」の調査と現地調査を併用することで、より深く二ノ瀬の地域史をあきらかにできた。

さらに特筆すべきは、この研究で参考とするのが、地域で調査・研究を進める大原古文書研究会と会報『文化・大原』、そして代表上田寿一氏の研究である。上田氏は昨年度の2013年3月17日（日）、京都府立総合資料館主催の「地域の歴史を学び未来へ伝えるシンポジウム—洛北岩倉・大原・松ヶ崎の実践報告を中心として—」の報告者の一人であった。上田氏は二ノ瀬村の古文書について、会報に数多くの史料紹介をされており西田論考の参考になったと聞く。このように地域で独自に研究を進めていく団体、人の活動が重要と考える。近世・近代の文書史料は、自治体の資料館や博物館、大学のみでは到底調査研究はできない。このようなかで、地域の歴史の調査・研究が進むのは人の力であり、地域情報データベースでもこの力を利用していく必要がある。

同様の事例が2014年3月9日（日）に行われた歴史学科主催の「城陽・青谷の文化遺産と歴史—京都府立大学の地域研究の報告会—」である。これも本報告書の西井綾乃氏の報告に詳しいが、地域の青谷古文書を読む会・城陽市教育委員会の共催のもと、城陽市の青谷コミュニティセンターで実施された。2011・2012年度 ACTR「神社・街道を中心とした城陽市域文化遺産の調査と情報化」（研究代表者菱田哲郎）の成果として、前半は府大側から教員・院生5名の報告を行った。後半にはその報告を受けながら質疑応答が行われたが、その際に共催の青谷古文書を読む会会長の塚脇康宏氏から会の活動報告があった。会では5年ほど前から地域の有志

を募り、地域の古文書を読み、現地調査や市外の文書調査に出向くなど、積極的な活動をされている。大原古文書研究会と同様に地域の人々が地域の資料を着実に調査、分析、活用する事例として重要な活動である。

3 例目は、文化遺産デザイン研修における、AR(Augmented Reality、拡張現実)技術を利用した歴史遠足の企画である。その内容は本報告書の井上真美氏の報告に詳しいが、京都府立総合資料館の「寺子屋講座 京都の歴史を歩こう！2014」企画である。2014年3月23日に実施されたが、井上報告では、調査の内容や2月に学内向けに行われたプレ遠足の様子が詳しく紹介されている。ARはトリガーという目標を写すことによって映像が流れていくが、岡崎では六勝寺の遺物や復元図、大典記念京都大博覧会の行進曲の音楽、琵琶湖疏水の文書など、現地ではみることができない資料を組み込んでいる。この企画は、地元「京都岡崎魅力づくり推進協議会」とも連携し進めている。AR技術は文書や映像、音声など多様な文化遺産・資料を組み合わせることが可能であり、地域情報データベースでも活用可能な技術といえる。

おわりに

本稿では、京都地域情報・文化遺産データベースの展開と活用というテーマで事例を紹介した。展開に関しては「郡村誌」のテキスト化、長崎県対馬との記載の比較、統計地図の作成、活用に関しては地域との連携を二ノ瀬・城陽、AR技術の利用を岡崎の活動から概説した。2年間にわたりデータベースの企画、展開、活用に関して、事例を積み重ねながら模索してきた。今後の構築に際してはこれらを組み合わせて、より使いやすく、理解しやすいデータベースを目標としたい。

¹東昇「京都地域情報・文化遺産データベースの企画－目録データと歴史資料－」同編『京都地域情報・文化遺産データベースの企画・展開・活用－明治期の「郡村誌」と近世村町別文書一覧－』2013年、1～27頁。

²東昇「明治期における対馬の安徳天皇陵墓認定運動」長崎県文化財調査報告書209『対馬宗家文庫史料絵図類等目録』2012年、367～377頁。同『対馬・宗家と安徳天皇陵』交隣舎出版、2014年（予定）。

³「上下県郡村誌」13 13-1 1、長崎歴史文化博物館蔵。

⁴山田洋一「京都地域情報・文化遺産データベースの全国展開について－明治初期等国別領主別行政村配置図より－」（前掲『京都地域情報・文化遺産データベースの企画・展開・活用』29～74頁）。

⁵谷謙二「地理情報分析支援システムMANDARA」<http://ktgis.net/mandara/>

⁶東昇「明治前期「村誌」の情報化」京都府立大学文化遺産叢書3『八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図－地域文化遺産の情報化－』2010年、172～190頁。同「城陽地域の「村誌」の情報化」京都府立大学文化遺産叢書6『城陽市域の地域文化遺産－神社・街道の文化遺産と景観－』2013年、275～304頁。

京都地域情報・文化遺産データベースの展開・活用
— 「郡村誌」の地図化と二ノ瀬・岡崎を事例に—

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）

発 行 京都府立大学文学部歴史学科文化情報学研究室

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2014年3月31日

印 刷 株式会社 双林印刷社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル
